

モデル事業名	高齢化もなんのその！地域の“絆”再生事業
活動団体名	社会福祉法人 高山市社会福祉協議会
ホームページ	http://info@takayamashakyo.net
所属/ 担当者名	地域福祉課 地域係 中林 力
連絡先	0577-59-2500 takane@takayamashakyo.net
活動地域	岐阜県高山市高根地域

● 活動地域の概要

集落の数：11 集落（4 世帯 4 人で構成する地区も有る）人口：498 人（H18 年 613 人、H19 年 554 人、H20 年 513 人）
 年齢別人口構成の推移：合併や学校統廃合による人口流失があり、特に 40 歳代までの減少が著しい
 世帯数：232（H18 年 258、H19 年 244、H20 年 238）高齢化率：46.3%（H18 年 37.5%、H19 年 40.6%、H20 年 44.0%）
 公共交通：旧高山市からの定期バス 1 日 3 本、町内タクシー無
 産業：農業、土建業、林業、サービス業が中心、通年民間雇用は 70 人に満たない



【位置図】



【地域内の使われなくなった建物】



【冬季集合住宅に使用】

● 活動地域の課題

高山市の中でも高根地域の高齢化は著しく進行している。また、平成の大合併を機に旧高山市を中心とした人口移動が生じ、現時点では 500 人（合併時と比較し約 20%減）を切っている。現在、人口移動は落ち着いた状態にあり、今後は自然動態による人口減少により地域が徐々に衰退していくと予想される。また、この地域は福祉ニーズを満たす社会資源も少ない。このことから、地域住民を中心とした高齢者の支援が今後益々必要である。

● 活動の内容

・平成 20 年度

- ① 高山市の遊休施設である旧教員住宅を冬季高齢者専用住宅に改装し、開設。
- ② 他地域の若者などを募り、冬季間の除雪ボランティア組織を結成。上記施設入居者の家屋の雪下ろしなどを実施。
- ③ 現在活動している高齢者でつくるグループを活用し、流木オブジェや寒干し大根などを高根地域の新たな特産品とし、販路の拡大を図ることで、高齢者の生きがいの創出を図る。（H20～）

・平成 21 年度

- ① のくとい館開設事業。（継続事業）
- ② ボランティアによる入居者を中心とした地域高齢者の家屋の雪下ろしなどを実施。（継続事業）
- ③ 高齢者でつくるグループ「高根町の元気を出す会」の特産品づくり支援による生きがいの創出。（継続事業）
- ④ 道の駅のほか、朝市での特産品の販売など、特産品の販路の拡大。
- ⑤ 集落支援員などとの協働による寒干大根の生産量向上に向けた大根生産用農地の拡大

● 活動の成果

・平成20年度

このモデル事業の導入で“地域コミュニティ”の再生事業を実施し、高齢者が安全で安心に暮らせ、また生きがいの創出の糸口を見出すことが出来た。遠くで暮らす入居者の家族からは、「こんなに安心して過ごせた冬は初めて」との喜びの声も多数あり、本事業の有効性を再認識したところである。また、この取組みは、全国的にも珍しくマスコミや行政関係者などの視察が数多くあり、今後の事業確立に向けた更なる展開が必要である。

この事業を通して、自分の生まれ育った地域に喜びを持ち続け、行政が21年度から高根地域に導入する集落支援員（総務省過疎問題懇談会が提唱した事業）との交流を図りながら、地域の高齢者は地域住民が支援し、守り続けていくことの重要性を再確認しながら更なる地域活性を目指す。

・平成21年度

この事業は3つの継続事業と2つの新規事業に分かれており、現在進行している事業はこのうち継続事業の3つである。特にのくとい館開設事業は事業開始月（12月）の半年前から、入居予定数がいっぱいになった。これは昨年一年間の成果が地域住民に受け入れられた結果ではないかと思う。入居時にはお互いに抱き合いながら、再会を喜び合っている利用者の方もおり、のくとい館での生活を楽しみに入居してこられた方がほとんどである。交流サロンやふれあい餅つき大会など、地域住民との交流を中心とした行事を行うことで、のくとい館を地域の拠点としても機能しつつある。入居していない地域の独居・高齢者にとっても、のくとい館があることで、安心して冬の生活を送ることが出来るようになったとの声が寄せられた。

また、昨年に比べて雪が多く、高齢者の家の雪下ろしボランティアも今年に入って2回ほど実施した。高齢化率の向上と共に、雪下ろしの担い手が足りない地域にとってはとても有効であった。これから益々必要な支援であり、継続できるシステムづくりが大切である。

地域の高齢者で組織する特産品づくりは、現在、寒中作業に入っており、元気を出す会のメンバーが中心となって、集落支援員の協力も得ながら行われている。冬の間、除雪作業しかすることのなかった高齢者にとっては、働く楽しさと、生きがいをもって過ごせるようになった。



● 今後の課題及び展望

・課題

来年度に向けて入居者数が18名以上になった時に、どのように選定するかが苦慮される。元気な人が冬の間、楽しく暮らすという事業の趣旨から言っても、身体的元気度を基準にする方法がのぞましいのか十分な検討が必要である。

賄いや施設管理のスタッフを、この地域から確保することが年々難しくなっており、この事業の長期継続を考える中で重要課題のひとつでもある。

のくとい館継続にあたっての予算の確保が最大の課題である。年金受給額の少ない入居者への負担には限度があり、それに変わる安定的な原資が確保されることが、継続への鍵となる。

・展望

将来的に入居者自身で、食事をつくれるシステムを検討したい。また、地域の高齢者が取り組んでいる特産品づくりを、入居者の半数以上が関わる体制を作り出す。このことは、収益を生み出すことにつながり入居者の負担の軽減につながる。